

2023. 6. 15

邪馬台国論争の新展開(レジメ)

吉田洋一

1) 魏志倭人伝の解釈

* 魏志倭人伝：中国大陸王朝の二十四史の一つ「三国志」の「魏書・東夷伝・倭人条」をさしており、290年頃西晋の陳寿(?—297)によって編纂された。現今流布しているのは12c末に刊行された「紹熙本」である。原本からは何回も写本され、この間誤字脱字も生じた可能性があるが、邪馬台国時代(2c末～3c後半)の倭国については「魏志倭人伝」しか主要な史料はなく、史実に迫るには限界がある。

* 邪馬台国：古くからヤマトコクの音訳として認知されていたが、江戸時代に九州説論者の新井白石が通詞の発音する当時の邪馬台の中国語音読から「ヤマタイコク」としてからこの読み方が広まった。現存する「魏志倭人伝(以下倭人伝)」の版本では「紹熙本」も「紹興本」も「邪馬壹國」と表記しているが、「臺」は「壹」と似ているため写本で誤写が生じたものとするのが通説となっている。「臺」は貴字であることから、元々「邪馬壹國」だったとの説もある。「三国志」より後に編纂された「後漢書」には「邪馬臺国」と記され、初唐に編纂された『隋書』と『北史』には、「倭国は、……を邪靡堆に都す、即ち魏志の所謂邪馬臺なる者なり」とあり、隋代には「邪馬台国」と認識されていた。

* 九州説と畿内説：倭人伝には、朝鮮半島の帯方郡から邪馬台国への道のりが記録されているが、邪馬台国の所在地について、江戸時代から邪馬台国論争が始まった。明治期には九州説をとる東大の白鳥庫吉と、畿内説をとる京大の内藤湖南の間で激しい論争が起きた。その後も主に畿内説と九州説に分かれて論争が続いてきた。

* 奴国までは北部九州の各地に比定されてきたが、その先を記述通りに進むと、邪馬台国は太平洋上に立地することになる。奴国からの航路としては九州東岸航路、瀬戸内航路、山陰航路が考えられ、水行二十日の投馬國はそれぞれ宮崎近辺、吉備、出雲が候補と考えられる。倭人伝によれば倭国内の国の戸数の中で、投馬國の5万戸余り、邪馬台國の7万戸余りがある規模で際立っており、規模からみてこの両国を九州内で求めるのは、無理があるとの指摘もある。大和説は里程においては有利であるが方角で不利とされ、九州説はその逆で里程に分がなく、方角では有利とされてきた。一方「後漢書」の楽浪郡と邪馬台国の距離とする1万2千里から九州北部とする説もある。また奴国以降について伊都国を起点とした記述とする説や邪馬台国は伊都国に隣接するとする説もある。現在も論争は決着をみていないものの、倭人伝等の史書の解釈からは結論は得られないとの認識が大勢となり、論争は既に収束した感がある。

* 倭国連合：魏志倭人伝によれば「邪馬台国に至る。女王の都とする所なり。」「女子を共に立て王と為す。名は卑弥呼といふ。」とあり、邪馬台国は倭の都であり、卑弥呼は邪馬台国の王ではなく連合国家倭国の王であった。倭国は邪馬台国を都とする約30の国からなる連合国と考えられ、九州説では九州北部・朝鮮半島南部の国家連合となり、畿内説では大和周辺から九州北部・朝鮮半島南部を含む国家連合ということになる。

* 女王卑弥呼(2c末—247)：「卑弥呼」の名は古代日本語を聞いた当時の魏の使者が、それに最も近い音の蔑字を当てたと考えられる。現代日本語では一般に「ヒミコ」と呼称されている

が、当時の正確な発音は不明である。元の日本語では、ヒミコ(日巫女、日御子)、ヒメコ(日女子、姫子)、ヒメミコ(日女御子、姫御子、姫巫女)だったなどの説がある。倭人伝の「鬼道に事へ、よく衆を惑はす」から推測すれば、巫女であった可能性が高い。

2) 歴史的連続性と倭国大乱

* **歴史的連続性**：邪馬台国時代の直前・弥生時代後期にあたる 2c 後半までは倭国の中心は九州北部にあり、中国大陸との交流の中心であった。九州北部の繁栄と邪馬台国は時期的には連続・重複している。

* 文献上に現れる最古の国家として奴国があり、『後漢書』によれば、57年倭奴国が後漢の光武帝に朝貢して与えられたとされる金印が発見されている。現在の福岡市や春日市など福岡平野一帯を支配していたとされ、領域内の那珂遺跡群は博多区の縄文時代晩期末からの二重環濠集落跡で、3世紀頃の都市計画によって造られたとみられる国内最古の道路跡(幅7m・南北へ1.5km以上の直線)が見つかっている。

* 伊都国は2世紀後半までの北部九州の中心だったとされている。倭人伝で王がいたと明記されている倭の国は邪馬台国と狗奴国の他には伊都国だけである。伊都国内に位置する平原1号墓からは、当時の日本でも最高級といえる副葬品類が出土している。伊都国の中心集落である三雲・井原遺跡は、弥生時代の九州北部を代表する集落であり、伊都国の王都と目され、出土遺物も豊富で、大陸からの多数の遺物や、吉備系・東海系の土器も出土しており交流の拠点としての性格も有していた。伊都国王を盟主とする九州の国家連合を想定する説もある。

* 倭国大乱：倭人伝には「その国、本はまた男子を以って王と為す。住みて七、八十年、倭国は乱れ、相攻伐して年を歴る。」とあり、『後漢書』では「桓帝・靈帝の治世の間(146年 - 189年)、倭国大乱」とあり、倭国大乱は弥生時代後期の2c後半に起こったと考えられる。2c後半から3cにかけて、複数の弥生遺跡から大乱の痕跡と思われるものは各地で認められるが、大乱の原因や規模についての歴史家の見解は様々に分かれている。

* 大乱による文化断層：3cに中国地方から近畿・東海にかけて銅鐸、九州北部では広形銅矛や破鏡などが、各地で一斉に埋葬されたり廃棄されており、広域に文化面の断層的な変化が生じている。その後3世紀前半の卑弥呼による新しい政治体制が再編成され、さらにその後のヤマト政権下の文化に継承されている。

3) 考古学知見

* **大規模集落遺跡**：戦後、弥生遺跡の発掘調査の成果などが続々と挙げられ、その代表が1970年代から80年代にかけて調査の進んだ吉野ヶ里遺跡と纏向遺跡である。発見当初、共に九州説・畿内説における邪馬台国の有力候補地とされた。

* **吉野ヶ里遺跡**：1986年からの発掘調査によって発見された佐賀県の遺跡で、弥生時代の大規模な環濠集落跡である。遺構や出土品には九州北部をはじめ日本各地や中国大陸、朝鮮半島、南西諸島のものと共通・類似した特徴を持ったものが見られる。弥生時代後期には外壕と内壕の二重の環濠が造られ、環濠内に見張りのための物見櫓が複数置かれてい

た。共同墓地には多数の遺体がまとまって埋葬され、人骨の中には倭国大乱を思わせる怪我人や矢尻が刺さったままのもの、首から上が無いものなどもある。近畿地方や各地の環濠集落と同じように古墳時代の始まりと共に、集落はほぼ消滅する。一時は邪馬台国の候補地とされたが、現在ではピークの時期が邪馬台国時代より古い段階とされ、有力候補地ではないとの見方が大勢である。

*** 纏向遺跡**：奈良県桜井市の三輪山の北西麓一帯にあり、弥生時代末期から古墳時代前期にかけての国内最大級の集落遺跡で、邪馬台国畿内説の最有力地とされている。都市計画がなされていた痕跡と考えられる遺構も随所で確認されている。まだ発掘途上で全体像は不明だが、遺跡地図上では遺跡範囲は東西約 2km・南北約 1.5km のほぼ楕円形である。遺跡には最古の巨大前方後円墳とされる箸墓古墳が含まれている。これまで、邪馬台国時代を弥生時代としていたが、近年では考古学的な成果から邪馬台国時代と古墳時代とが隣接・重複するとされ、纏向遺跡が邪馬台国の最有力候補となっている。

*** 纏向型前方後円墳**：纏向遺跡には纏向型前方後円墳と呼ばれる古墳が分布する。前方部が低く短く、後円部と前方部の長さが 2:1 の比となっており、畿内系の土器を共伴していることが特徴で、関東地方から九州北部の各地に広がっている。特に纏向遺跡の石塚古墳やホケノ山古墳など 5 基は、いずれも墳丘規模 90-100 メートルの大型古墳である。弥生時代には各地で方形や円形の墳丘墓が作られ、この墓に通路が付けられ、纏向型に発展したと考えられている。従来纏向型は弥生墳丘墓とみられてきたが、弥生時代末期(200 年頃)の楯築遺跡墳丘墓がその源流と見られ、3 世紀前半に吉備の影響を受け纏向で成立し、方形墳丘の部分が拡大した定型化した前方後円墳へ発展したとの見方が有力となっている。

*** 纏向型と大和政権**：従来前方後円墳の成立と大和王権の成立が関係づけられて見られてきたが、前方後円墳の成立以前から纏向型は邪馬台国中心の政治勢力と関係して成立したと考えられる。一方、注目すべき見解として、纏向型は近畿地域の在来の弥生文化から出現したものではなく、弥生時代後期以前には近畿地域が、その後の政治的中心となる素地は乏しく、邪馬台国の時代に急速に中心性が高まったとの指摘がある。

*** 箸墓古墳**：巻向遺跡の巻向型前方後円墳と共存しており、定型的な前方後円墳で、築造時期は 3 世紀中葉以降と考えられる。宮内庁により百襲姫命の墓にとされているが、実際の被葬者は不明で倭迹迹日百襲姫命=卑弥呼説を含め、卑弥呼の墓との説が根強くある。埋蔵品の年代測定等から、築造推定年代と卑弥呼の没年の 250 年頃とが重なってきており、卑弥呼説が高まっている。魏志倭人伝に記された径百余歩とする大きさや殉葬の塚の存在についての論争がある。冢を作ったのは、倭人伝の記事から見て魏の使者張政が倭に滞在中のことと推測されるが、箸墓古墳がその期間に造られたとするには時間的に疑問があり、炭素年代測定にも不確実な面があり、卑弥呼の墓とするのは疑問も残る。被葬者については台与説や崇神天皇説も出されている。

*** 三角縁神獸鏡と卑弥呼の鏡**：魏が遼東から朝鮮半島北部にかけて勢力を張っていた公孫氏を滅ぼすと、卑弥呼は同年の景初二年(238：景初三年説が通説)に魏朝へ直ちに朝貢の使者を遣わした。これに対し皇帝は卑弥呼を魏倭王となし、金印紫綬と銅鏡百枚を含む多くの贈物を下賜した。明治期以降、各地で三角縁神獸鏡が発見され、これが下賜された魏鏡ではないかとされてきたが、1972 年に景初三年銘のある三角縁神獸鏡が発見されるに及

んで、一挙に有力視された。

* 1981年に中国古代鏡の専門家である王仲殊氏が三角縁神獸鏡は「イ)中国では出土せずロ)同時期の中国鏡は10 cm程度なのに直径が20 cm以上ある。ハ)似た文様の平縁神獸鏡と三角縁画像鏡は、呉鏡である」と、従来の日本の学説を全面否定し、三角縁神獸鏡は中国で製作されたものではなく、呉の職人が倭国に渡り、倭国内で製作したものであると結論し、大きな波紋を投げかけた。

* その後日本では、銅鏡に紐(ひも)を通す鈕の紐孔の形状の違いや、微妙なデザイン上の変遷等を手がかりに、初めは中国で生産されたものが我国へ流入し、その後国産されたとの説が出され現在支持されている。我国で現在発掘されている三角縁神獸鏡は、既に520面を超えており、更に増し続けている状況にあるが、中国製の鏡が卑弥呼に下賜された鏡との説も成り立つことになる。但し卑弥呼の遣使は魏志倭人伝のとおり景初二年とすれば、景初三年銘の三角縁神獸鏡は根拠とはなり得ない。

* 鏡の地域・種類・埋葬方法の変化：弥生末期から古墳時代にかけて(200～250頃)、明らかな変化がみられる。弥生時代後期(0～200)までは九州北部に集中して後漢鏡が出土し、魏鏡は確認されない。古墳時代(250～)になると近畿地方を中心に後漢鏡も少量含まれるが神獸鏡を主とした魏晋鏡に替わる。

また古墳への副葬形態は、弥生後期(0～)から北州北部で破碎鏡の副葬が行われたが、3cに入ると破碎鏡の習慣はみられなくなり、前方後円墳の完形鏡の副葬が全国に広がり、明らかな断絶がみられる。

* 弥生終末期(200～250)には小型倭製鏡が九州北部、更に近畿地方でも生産が行われるようになり各地に流通したが、250年頃には生産・流通が終了し、古墳時代にはヤマトの地で新たな技術で倭製鏡の生産が始まり、技術の連続性はみられず、邪馬台国の時代に文化の断層的な変化と文化の発信地の九州北部からヤマトへの移行がみられる。

5)新しい潮流—航路と鉄が示すもの

魏志倭人伝の記述の解釈論争から、平成以降(1990代以降)は発掘調査の進展から遺跡の評価に重点が移り、併せて古墳・銅鏡・副葬品などの研究成果が注目されている。近年は航海の専門家の議論も加わり、新しい視点として交易に関する知見が新たな古代史解釈展開を開きつつある。

* 航路：最近、3cに朝鮮半島からの鉄と、糸魚川の翡翠の交易の航路があったことが提唱され、また瀬戸内航路は潮流の速さと干満の差の大きさから当時の手漕ぎ船では航海が困難であったと指摘され、瀬戸内航海が可能となったのは6c以降だったとみられている。

* 交易の代表鉄器：従来近畿地方での鉄器の出土例は弥生後期までは極わずかに限られており、九州北部を別格として、吉備、出雲、中部地区にも及ばないことが明らかにされている。九州北部を凌ぐようになるのは古墳時代=ヤマト政権時代に入ってからである。大和の邪馬台国はもともと交易の拠点でも強国でもなく、卑弥呼が他の列強国に擁立されてから、倭国連合国家の都として急激に発展したと考えられる。

(了)